

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

伊那電気鉄道に私財を傾け、伊那谷の  
西郷隆盛と呼ばれた **伊原五郎兵衛**

伊原五郎兵衛（幼名：恒次）は、明治13年10月、長野県下伊那郡飯田町の漆器商伊原五郎兵衛の三男として生まれた。父五郎兵衛は飯田の素封家で、県会議員や飯田町長を務めた。中央西線のルートを巡って、木曾谷経由か伊那谷経由かが大きな政治問題となったが、結局明治27年、木曾谷経由で決着した。このため、伊那谷の人たちは辰野・飯田間の私設鉄道を計画し、五郎兵衛もその発起人となって奔走し、明治30年に内務大臣の許可を得たが、資金が集まらず設立をみないまま時間が過ぎていった。幼い恒次はこうした父の姿を見ながら育ち、県立下伊那中学飯田支校、松本中学、第一高等学校を経て東京帝国大学法学部に入學、明治天皇より、恩賜の銀時計を賜り（首席卒業）、当時の陸奥宗光外相からの招聘もあり、外交官を目指していた（同期生に後の首相吉田茂）。しかし、明治37年9月、兄廣司が日露戦役で戦死（金鷄勲章授受）し、父も同39年に他界したため、同年大学を卒業した恒治が家業を継ぎ、五郎兵衛を襲名するとともに、伊那谷への電気鉄道敷設の遺志も引き継いだのである。



伊原五郎兵衛

## 伊那電気鉄道の経営

伊那電車軌道（大正8年8月伊那電気鉄道に改称）は、明治40年9月に創設（社長辻新次）され、辰野・飯田間66キロメートル（後に天竜峡まで延長）の電車運転をめざした。同じ辻新次が社長を勤める諏訪電気から電気の供給を



伊那電気鉄道開通記念帖

を受け、明治42年12月、辰野伊那松島間8.6キロメートルが開通、運転区間を順次延長し、大正12年8月、飯田まで開通した。電車運転とともに



伊那電車軌道開業の花電車

沿線区域に電気の供給を行い、大正6年には駒場電気、神稲電気を買収、大正7年には飯田電灯を合併する傍ら、自前の発電所建設を進め大正2年12月、砥川発電所（450kW）を手始めに、松川第二、松川第三、松川第四、太田切などの発電所を次々に建設し、伊那谷随一の電気事業となった。電気事業は収入の半ばを占め、伊那電気鉄道の経営を支えた。



開業当時の飯田駅舎



松川第三発電所取水口・沈砂池



砥川発電所水槽扁額「滾々不尽」(辻新次)

伊原は、大正5年3月に専務取締役となり、私財を擲って経営に取り組んだ。創業時代には自ら切符切りや駅舎清掃も行い、「コロンブスの亜米利加発見の道程に於るか如き辛酸」を嘗めながら、資金調達や経営の合理化に取り組み、20年の歳月をかけ、昭和2年12月、天竜峡までの80\*キロメートルが開通した。事業遂行にかかる思いとその風貌から、「伊那谷の西郷隆盛」と呼ばれることもあった。

## 関連事業との関わりと躰き

伊原は、昭和3年の第1回普通選挙で政友会の代議士として当選を果たし、また経営難に陥った鉄道や電灯会社の建て直しに協力を惜しまなかった。伊原が関わった会社は、上高地や浅間温泉と松本とを結ぶ筑摩電気鉄道(後の松本電気鉄道、昭和3年社長就任)を初め、三河鉄道、笠原鉄道、武州鉄道や、天竜川電力、福島電灯、諏訪電気など47社に及んだという。

また、伊原の夢であった鉄道で伊那谷と太平洋を結ぶには、伊那電を含め三信・鳳来寺・豊川の各私鉄を乗り継ぐ必要があった。そのため、特に三信鉄道の建設にあたっては、急峻な地形故に、工事は困難を極めたため、自ら陣頭指揮を行ったものの、その過酷さに昭和5年、自身も助膜炎を患って入院し、それを機に、関係した多くの会社から身を引いている。

伊那電気鉄道は、昭和18年8月三信鉄道(昭和11年全通)ほか2線とともに、国有化され国鉄飯田線となった。この際も伊原は官憲に頭を下げることを嫌い、対立したこともあり、昭和19年に社長を勤めていた松本電気鉄道を解任されることがあった。その後は静かな晩年を送りつつ、昭和27年4月、72歳の生涯を閉じている。同年、飯田線建設の功労者として「伊原五郎兵衛頌徳碑」が飯田駅前に建立された。「辰野天竜峡間八十軒に亘る電気鉄道を完成せり、更に三信鉄道敷設の難工事に尽力し、かくて表裏日本短絡路通路を見るに至りたるすへてこれ氏の卓越せる識見と手腕による」とその功績が刻まれている。同碑は一時場所が移っていたが、平成22年3月、再び駅前に移設された。(浅野 伸一)



伊原五郎兵衛頌徳碑